Doshisha Journal of Health & Sports Science, 5, 9-21（2013）

原　著

（公財）日本体育協会スポーツ指導者資格所有者の障害者スポーツに対する意識に関する研究

藤田　紀昭[1]

Perceptions of sports for the disabled among sports instructors authorized by the Japan Sports Association (JSA)

Motoaki Fujita[1]

This study examined how people with disabilities and sports for the disabled are perceived by sports instructors authorized by the Japan Sports Association (JSA). A questionnaire survey of 1,000 sports instructors was carried out with the aim of elucidating areas of anxiety and the kinds of knowledge or skills that instructors would like to obtain. Responses were received from 434 people for a response rate of 43.4%. The survey results showed the following.

1) Of the respondents, 24.9% had experience in sports instruction for people with disabilities.
2) Many respondents understood the ability of people with physical disabilities to participate in sports. Many also understood that people with disabilities are different from the non-disabled in terms of having certain special abilities.
3) Many respondents also understood the appeal of sports for the disabled and the need for motor skills in these sports, while many also viewed sports for the disabled as special sports in which only people with disabilities participated.
4) Although it was felt that there was meaning in providing sports instruction to people with disabilities, many respondents also felt anxiety or difficulty.
5) By age group, more sports instructors in their 60s than in other age groups had lower levels of understanding of physical and mental disabilities, sports for the disabled, and sports instruction for people with disabilities.
6) Many of the instructors who had experience in sports instruction for people with disabilities had a high level of understanding of people with physical and mental disabilities, sports for the disabled, and sports instruction for people with disabilities.
7) Many instructors felt anxiety with regard to risk management and how to work with people with disabilities in providing sports instruction.
8) Many instructors wanted to learn sports instruction methods for people with disabilities, emergency responses, and how to work with people with disabilities in order to provide sports instruction for the disabled.

In the light of these results, it would be beneficial to hold workshops corresponding to the needs of JSA sports instructors and other sports instructors in the community.

【Keywords】Japan Sports Association, Sports instructors, Sports for the disabled

本研究では（公財）日本体育協会公認のスポーツ指導者が障害者や障害者スポーツに対してどのような意識を持っているのか，また，どのような点に不安を持ち，どのような知識や技術を身につけたいと考えているのかを明らかにすることを目的とした．スポーツ指導者 1000 人に対してアンケート調査を実施した．回答者は 434 人，回収率は 43.4％であった．調査の結果以下のことが明らかになった．

①回答者の 24.9％は障害者のスポーツ指導の経験を有していた．
②身体障害者がスポーツを実施する能力に理解をする人が多い一方で，障害者は特別な能力を有する人など障害者は健常者と違う人だと理解する人も多かった．
③障害者スポーツの面白さや運動技術の必要性を理解する人が多い一方で，障害者スポーツは障害者のみが参加する特別なスポーツと考える指導者も多くみられた．
④障害者のスポーツ指導はやりがいがあると感じているものの，不安や困難さを感じる指導者が多かった．
⑤身体障害者や知的障害者，障害者スポーツ，障害者のスポーツ指導に対する理解は年代別では 60 代の指導者に他の年代と比べて理解度が低い人が多くみられた．
⑥障害者のスポーツ指導経験のある指導者に身体障害者や知的障害者，障害者スポーツ，障害者のスポーツ指

1　同志社大学　スポーツ健康科学部（Doshisha University, Faculty of Health and Sports Science）

導に対する理解度が高い人が多くみられた.
⑦障害者のスポーツ指導に際してはリスクマネジメントや障害者との対応方法に不安を感じている指導者が多かった.
⑧障害者のスポーツ指導のために，障害者に対するスポーツ指導方法，緊急時対応，障害者との対応方法を学びたいとする指導者が多かった.
これらの結果を踏まえたうえで，体協のスポーツ指導者をはじめ地域のスポーツ指導者のニーズに応じた講習会等が開催されることが望まれる.

【キーワード】（公財）日本体育協会，スポーツ指導者，障害者スポーツ

1. はじめに

2011 年 8 月にスポーツ基本法が施行された．この法律は，1961 年に制定されたスポーツ振興法を 50 年ぶりに全面改正したものである．すべての人にスポーツを楽しむ権利を認め，スポーツの推進は国の責務であること，市民が楽しむ地域スポーツおよび国際競技力の向上を推進することなどを明記している．スポーツ振興法には障害者[注1)] のスポーツに関する記載はなかったが，スポーツ基本法では基本理念，第 2 条の 5 で「スポーツは，障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう，障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」としている．以下の条文でも障害者スポーツについて触れている．

これを受け，翌年 3 月 30 日にはスポーツ基本計画が発表された．この中で今後 5 年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策として 7 つの政策を掲げ[注2)]，それぞれに関して障害児・者の体育，スポーツに関しても言及している．そして，2012 年度文部科学省では新規事業として「健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業」を立ち上げ約 7 千 1 百万円を計上した．

このようにスポーツ基本法成立以降，障害者のスポーツは厚生労働省のみならず文部科学省の対象事業として，各地域において障害のない人のスポーツと一体的に振興していく道が模索されている．

障害者のスポーツを普及していくためには障害者スポーツセンターなど障害者専用・優先施設でのスポーツ振興に加え，一般学校での体育や総合型地域スポーツクラブをはじめとした地域のスポーツクラブでの障害児・者の受け入れが重要である．藤田（2012）は総合型地域スポーツクラブにおける障害者の受け入れに関して，障害や障害者について知識のある人の存在が重要であることを指摘している．同じ調査では全体の 8.8％のクラブにしか障害者スポーツ指導者資格を持っている指導者は配置されていなかった[注3)]．クラブの指導者が障害者や障害者スポーツについての知識や指導経験を積むことで地域のスポーツクラブにおける障害者の受け入れは進むものと考えられる．

一方，文部科学省の調査では総合型地域スポーツクラブの指導者のうち有資格者は 42.5％（文部科学省 2012）であった．これら総合型地域スポーツクラブの指導者の多くは（公財）日本体育協会のスポーツ指導者資格を所有しているものと推察される．クラブの有資格指導者が資格取得後の講習会等で障害者や障害者スポーツについて知識を持ち経験を積むことは地域のスポーツクラブで障害者を受け入れを進めることの有効な手段だと考えられる. そこで本研究では, (公財) 日本体育協会のスポーツ指導者資格取得者を対象として障害者や障害者スポーツに対する意識を明らかにする．

2. 先行研究の検討

（公財）日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導者に関する研究には藤田ら（2003），内田・永野（2009），福岡県障害者スポーツ協会他（2011）などの研究がある．

注1) 本論文では「障害者」の表記は漢字の「障害者」とする．法律による表記が「障害者」であること，一般的な意味での障害者スポーツ指導者と（公財）障害者スポーツ協会公認の障害者スポーツ指導者との使い分けによる混乱を防ぐことが理由である．

注2) 掲げられているのは次の 7 つである．
①学校と地域における子どものスポーツ機会の充実
②若者のスポーツ参加機会の拡充や高齢者の体力つくり支援等ライフステージに応じたスポーツ活動の推進
③住民が主体的に参画する地域のスポーツ環境の整備
④国際競技力の向上に向けた人材の養成やスポーツ環境の整備
⑤オリンピック･パラリンピック等の国際競技大会等の招致･開催等を通じた国際交流・貢献の推進
⑥ドーピング防止やスポーツ仲裁等の推進によるスポーツ界の透明性，公平・公正性の向上
⑦スポーツ界における好循環の創出に向けたトップスポーツと地域におけるスポーツとの連携・協働の推進

注3) 筆者が 2009 年に実施した調査では障害者スポーツ指導者資格所有の指導者を配置しているクラブは 468 クラブ中 41 クラブであった．

藤田ら（2003）は障害者スポーツ指導員資格取得者全員を対象として，活動の実態調査を行い，活動頻度の高い指導者ほど満足度が高く，指導に際しての不安が小さいこと，20 代の活動が停滞していること，指導員のニーズに合った情報提供がされていないこと，資格取得後の活動の場が少ないこと等を報告している．内田・永野（2009）は地域の障害者スポーツ指導者を対象として活動状況や指導者が不安だと感じている内容等に関するアンケート調査を実施した．その結果，指導経験のない指導者や指導期間の短い指導者は指導期間の長い指導者と比べて指導に関する不安を抱えていること，コンディショニングや心理面に関する知識も不十分であることを明らかにしている．そして，指導経験のない人はある人に比べると経験不足やルール等の理解に不安を持っていること，指導経験のある人は人間関係やコミュニケーションの取り方に不安を感じていることを指摘した．講習等においては障害者のスポーツ指導経験の有無別にニーズに合った内容を準備すべきだとしている．福岡県障害者スポーツ協会他（2011）は福岡ハンディキャップサポートの会の会員を対象として障害者スポーツ指導員としての活動実態及び意識に関する調査を実施した．その結果，定期的な活動を実施している人には「指導補助」として関わっている人が多く，単発的な活動をしている人には「運営サポート」として関わっている人が多いこと，障害者スポーツの活動場所が不足していると感じている人が 95％以上いること，障害者スポーツは「障害の有無に関係なく多くの人が楽しめる運動・スポーツ活動」と理解している指導者が多いこと，障害者スポーツ指導者は社会的な有利さや報酬を活動の動機とはしていないことを報告している．

これらの研究からは障害者スポーツ指導者は活動している人としていない人の二極化がみられ，活動している人ほど満足度は高く，不安が少ないが，指導者としての活動の場自体が少ないと感じている人が多いという点で一致している．

障害者スポーツや障害者に対する意識に関する研究には，Tripp et al.（1995），安井・時政（1998），安井（2004），藤田（2004），高野（2011），永浜･藤村（2011），永浜（2012）らの研究がある．藤田（2004），高野（2004）および永浜・藤村（2011），永浜（2012）は障害者スポーツに関する授業（講義と実技を含む）が大学生の障害や障害者スポーツに対する意識に与える影響に注目している．授業後においては授業前と比較して障害や障害者スポーツをポジティブに理解するようになったことが報告されている．Tripp et al.（1995）はスポーツを通した交流体験が障害者と健常者の間に仲間意識や相互協力を生みやすいことを示した．安井・時政（1998）および安井（2004）は車いすバスケットボールの選手との交流体験を通して大学生や小学生たちが障害や障害者スポーツに対してポジティブなイメージを持つようになったことを報告している．これら一連の研究では障害者スポーツについて知識を得たり，障害者スポーツを体験したり，実際に障害者と交流することで障害者や障害者スポーツに対して肯定的な意識を持つようになることを示している．

これらの研究では，障害者スポーツについて学んだり，体験したり，障害者とスポーツを通じて交流することで障害者や障害者スポーツのイメージが向上するという点が共通している．

教員の障害児体育に対する意識に関する研究には安井（2007），金山ら（2007a），金山ら（2007b），安井･山崎（2008），斉藤（2008），藤田ら（2008），金田ら（2009）などの研究がある．これらは同じ調査票を利用した一連の調査研究である．普通学校における障害児の体育では運動を楽しむことや運動を好きになること，友達と仲良くする態度を養うことを重要視する教員が多いことを明らかにしている．これに対してスポーツ観戦や運動技能の向上は相対的に低かった．障害児の在籍するクラスでの体育担当教員はルールや評価方法，種目を工夫しているものの，専門的な知識を得るための情報源や講習会等が少なく，難しいと考えている場合が多いことが明らかになった．通常学級における障害児の体育に関しては「健常児の障害理解」や「障害のある児童が他の子どもたちと関係の取り方を学ぶ」場として評価しているが，中学校においては健常児の負担を危惧する教員も一定数いることを報告している．

地域のスポーツ指導者の意識に関する研究には吉武ら（1995）や熊安ら（1996）の研究がある．吉武ら（1995）は大阪府内の男性地域スポーツ指導者，レクリエーション指導者，健康運動指導士らに対してスポーツ観や指導観，指導者の資質等に関する調査を行った．その結果，指導者が自らスポーツを実施するときのスポーツに対する意識としては仲間づくり，ストレス解消やさわやかな気分を味わうため，健康や体力の維持増進のためとする人が多い一方で，指導時に重視する点としては仲間づくりやスポーツ自体の楽しさ自信をつけさせることをあげる人が多かった．そして，これらは経験した競技の種類の影響を受けていることが明らかにされた．熊安ら（1996）は同じ調査から，男性指導者がスポーツによる人間形成を重視するのに対して女性指導者はスポーツそのものの楽しさを重視するという男女差を明らかにしている．

3. 研究の目的

前項でみてきたように，障害者スポーツ指導者や障害者スポーツを学んでいる学生，障害児の体育を担当する教員の障害児・者のスポーツ指導や障害児・者に対する意識についての研究，地域スポーツ指導者のスポーツ指導に関する意識についての研究については一定の研究の蓄積がみられる．しかしながら，地域のスポーツ指導者の障害者や障害者スポーツに対する意識について報告したものはみられない．「年齢や性別，障害等を問わず，広く人々が，関心，適性等に応じてスポーツに参画することができるスポーツ環境を整備」（文科省 2012）することはスポーツ振興の柱である．スポーツ基本計画の内容から考えると今後はこれまで以上に総合型地域スポーツクラブなどの地域スポーツクラブが障害者のスポーツの振興の一翼を担うことが期待される．先述の通り，現段階でそうしたクラブで障害者スポーツ指導者を配置しているところは非常に少ない．そのため，現有スタッフで障害者のスポーツ指導や事業の企画を行う機会が増えることが予想される．この場合，彼らが障害者や障害者スポーツに対してどのような意識を持っているか，障害者を指導する際にどのような点に不安を抱いているのか，どのような知識や技術を身につけたいと考えているのかを知ることは障害者のスポーツ振興，そして，スポーツ基本計画の実現を考えると重要である．

そこで本研究では対象を日本体育協会公認のスポーツ指導者資格を有するスポーツ指導者とし，スポーツ指導者が障害者や障害者スポーツに対してどのような意識を持っているのか，また，どのような点に不安を持ち，どのような知識や技術を身につけたいと考えているのかを明らかにすることを目的とする．

本研究で得られた知見は，今後地域のスポーツ指導者が障害者のスポーツ指導するための資質を高めていくための講習会等の内容を構成する際の基礎的な情報を提供することになる．加えて，スポーツ基本計画の実現や障害者のスポーツ振興といった点からも意義あるものと考える．

4. 研究の方法

本研究では（公財）日本体育協会および（公財）日本障害者スポーツ協会の協力を得て，スポーツ指導者資格（指導員，上級指導員，コーチ，上級コーチ，教師，上級教師，ジュニアスポーツ指導員，スポーツプログラマー，フィットネストレーナー，アシスタントマネージャー，クラブマネージャー，アスレチックトレーナ）1000 人に対してアンケート調査を実施した．調査期間は 2011 年 12 月 14 日から 2012 年 1 月 14 日までの 1 か月間である．

調査項目は指導者の属性に関するものが（指導経験年数，性別，年齢，専門競技，取得資格の種類，障害者のスポーツ指導経験の有無）6 項目である．身体障害者や知的障害者，障害者スポーツ，障害者のスポー

表1　身体障害者・知的障害者・障害者スポーツ・障害者のスポーツ指導に対する意識に関する質問項目

身体障害者に関する質問	①身体障害者は動きに制限があり，運動やスポーツもかなり制限されたものとなる ②障害者は気の毒だ（かわいそうな人だ） ③身体障害者がスポーツや運動をすることは危険である ④障害者の中には特殊な能力を持った人がいる ⑤障害者は障害のない人より能力が劣っている	1 点 全くそのとおり 2 点 どちらかといえばそう思う 3 点 どちらともいえない 4 点 どちらかといえばそう思わない 5 点 全く反対
知的障害者に関する質問	⑥障害者には突然大声を出したりするなど何を考えているかわからない人が多い ⑦障害者の発育・発達の可能性は小さい ⑧障害者は社会貢献できない ⑨知的障害者は運動のしかたやルールが理解できない ⑩知的障害者がスポーツを楽しむことは難しい	
障害者スポーツに関する質問	⑪障害者スポーツは特別なスポーツである ⑫障害者スポーツでも勝利することが一番大切である ⑬障害者スポーツはみても面白くない ⑭障害のない人のスポーツと比べて，障害者スポーツでは技術はそれほど必要ない ⑮障害者スポーツは障害者のみが参加するスポーツである	
障害者のスポーツ指導に関する質問	⑯障害者のスポーツ・運動指導には不安を感じる ⑰障害者のスポーツ・運動指導はできれば避けたい ⑱障害者のスポーツ・運動指導は障害のない人のそれと比べてやりがいが無い ⑲障害者にスポーツ・運動を指導するには特別な能力が必要である ⑳障害者のスポーツ・運動指導は難しい	

ツ指導に対する意識に関する内容が 20 項目（表 1 参照）である．これら 20 項目に関しては 5 件法にて回答を求め，より理解が進んでいると考えられる回答（全く反対）に 5 点，理解が十分ではないと考えられる回答（全くその通り）に 1 点を与えた．その他，障害者のスポーツ指導に関して不安に感じる点や知識を身につけたい内容等 4 項目である．

調査結果は単純集計の後，身体障害者，知的障害者，障害者スポーツ，障害者のスポーツ指導に対する意識に関しては「身体障害者に対する意識」「知的障害者に対する意識」「障害者スポーツに対する意識」「障害者のスポーツ指導に対する意識」ごとにそれぞれ 4 つの項目の得点を合計し，指導者の性別，年齢，指導経験年数，障害者のスポーツ指導経験の有無ごとに平均得点の比較検討を行った．

5. 結果

5.1　回答者の属性

434 名の指導者から回答を得ることができた．回収率は 43.4％である．回答者の属性は表 2 に示す通りである．男性が約 7 割，女性が 3 割，平均年齢は 51.6 歳（SD＝13.5），スポーツ指導経験年数の平均は 17.7 年（SD＝12.2），指導年数が 10 年以下の指導者が 37.8％，11 年から 20 年の指導者が 25.1％，21 年以上の指導者が 37.1％であった．障害者の指導経験のある人は 24.9％，約 4 分の 1 であった．

5.2　身体障害者，知的障害者，障害者スポーツ，障害者のスポーツ指導に対する意識

図 1 は身体障害者に対する意識に関する質問の結果を示している．「身体障害者の運動は危険である」「健常者より能力が劣る」という質問に対してはそう思わ

表2　回答者の属性（n＝434）

性別	n	%
男性	301	69.7
女性	131	30.3
NA	2	-
年齢（平均 51.6　SD 13.5）	n	%
21 ～ 39 歳	90	20.7
40 ～ 49 歳	96	22.1
50 ～ 59 歳	107	24.7
60 歳～	141	32.5
NA	0	-
指導経験年数（平均 17.7 年　SD 12.2）	n	%
0 ～ 10 年	164	37.8
11 ～ 20 年	109	25.1
21 年～	161	37.1
NA	0	-
障害者指導経験の有無	n	%
あり	108	24.9
なし	326	75.1
NA	0	-
資格種類（複数回答あり）	n	%
指導員	287	55.5
上級指導員	43	8.3
コーチ	56	10.8
上級コーチ	28	5.4
教師	31	6
上級教師	2	0.4
ジュニアスポーツ指導員	28	5.4
スポーツプログラマー	14	2.7
フィットネストレーナー	3	0.6
アシスタントマネジャー	12	2.3
クラブマネジャー	7	1.4
アスレチックトレーナー	6	1.2
合計	517	100

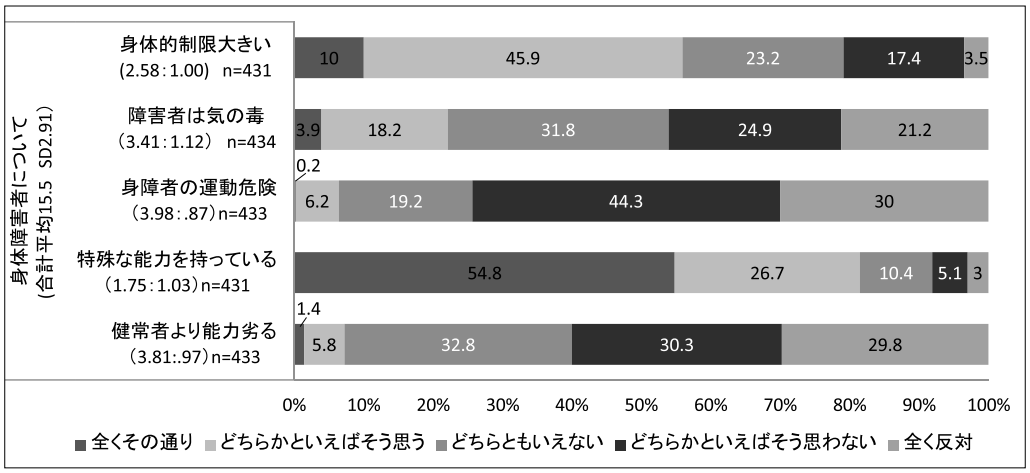

図1　身体障害者に対する意識

ない人が多かった（74.3％および 60.1％）．しかし,「障害者の中には特殊な能力を持っている人がいる」に対してはそう感じている人が多く（81.5％），健常者とは違う特別な人という認識を持っている人が多いことが明らかになった．身体的制限に関しては多くの指導者が身体障害者は制限を受けていると感じていた．身体障害に関する意識の 4 項目の合計得点は 15.5（SD 2.91）であった．

図 2 は知的障害者に対する意識に関する質問の結果を示している．各項目とも 3.5 点以上となっており，得点は比較的高い．とりわけ社会貢献に関する項目（4.39）とスポーツを楽しむ能力に関する項目（4.23）は高くなっている．知的障害者に対する意識に関する 4 項目の合計得点は 19.6（SD 3.23）であった．

図 3 は障害者スポーツに対する意識に関する質問の結果を示している．これら 4 項目に関してもすべて 3.5 点以上の得点となっており，得点は比較的高い．中でも「障害者スポーツでは技術はそれほど必要ない」という項目は 4.37 点，技術が必要だと感じている人は 86.6％となっており，指導者の多くは障害者スポーツにも運動技術は必要だと感じていることが明らかになった．「みても面白くない」も 4.03 点と高くなっており，障害者スポーツはみても面白いものだと感じている指導者が多い（73.1％）ことが明らかになった．これら 4 項目の合計得点は 19.3 点（SD 3.06）であった．

図 4 は障害者のスポーツ指導に対する意識に関する質問の結果を示している．「指導のやりがいがない」と感じている人は少なく（20.8％），やりがいがあると感じている人が多かった（76.5％）．しかし，指導は難しいと感じている人が約半数（49.8％），難しいとは思わない人は少なかった（19.1％）．「指導に不安を感じる」は 44.1％, 不安を感じない人は 28.1％であった．これら 4 項目の合計得点は 16.1 点（SD 3.62）であった．

5.3 指導者の属性別にみた障害者・障害者スポーツに対する意識の違い

表 3 は男女別にみた障害者・障害者スポーツに対する意識の違いをみたものである．いずれも統計的有意差はみられなかったが，4 項目とも女性の方の得点が

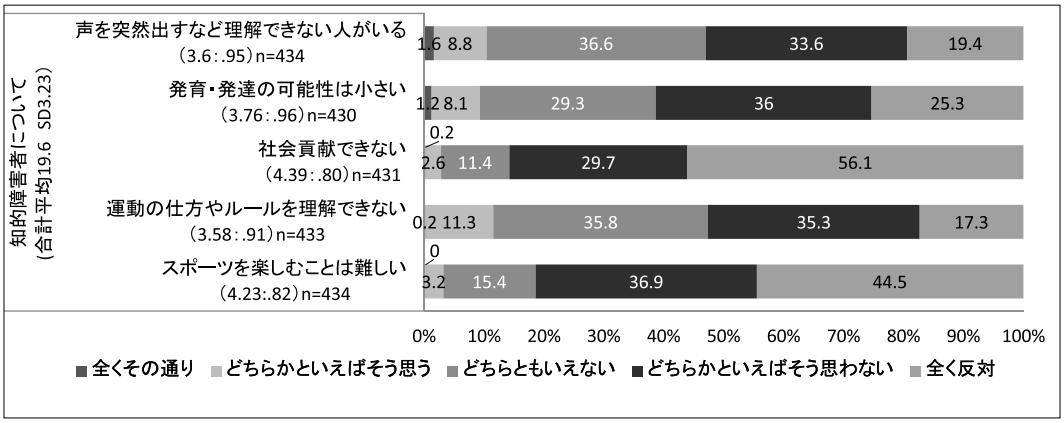

図2　知的障害者に対する意識

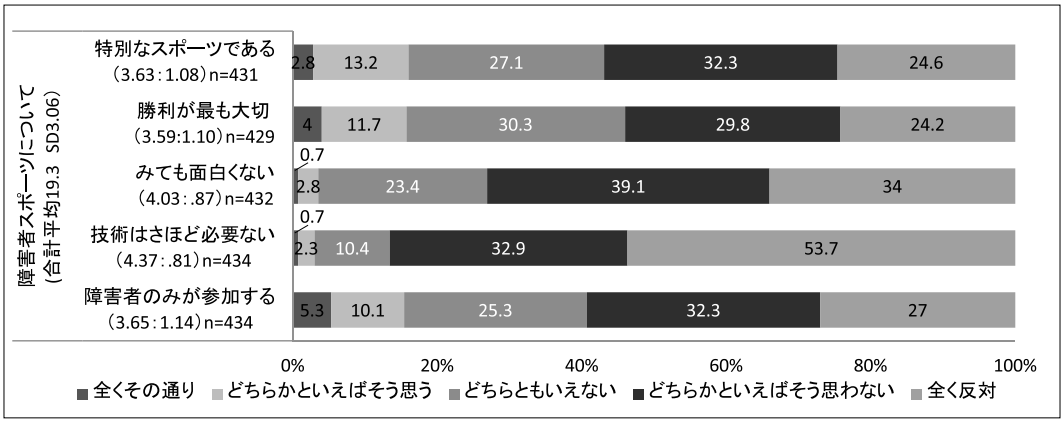

図3　障害者スポーツに対する意識

高い傾向がみられた．

表 4 は年齢別にみた障害者や障害者スポーツに対する意識の違いをみたものである．身体障害者に対する意識，知的障害者に対する意識および障害者スポーツに対する意識において差がみられた．多重比較の結果, 身体障害者に対する意識では 60 代と 40 代の間に，知的障害者に対する意識では 60 代と他の 3 つの年代の間に，そして，障害者スポーツに対する意識に関しては 60 代と 40 代，50 代の間で差が認められた．いずれにおいても 60 代の得点が低く，他の年代の得点が高いという結果である．60 代の指導者の身体障害者，知的障害者，障害者スポーツに対する理解が低い

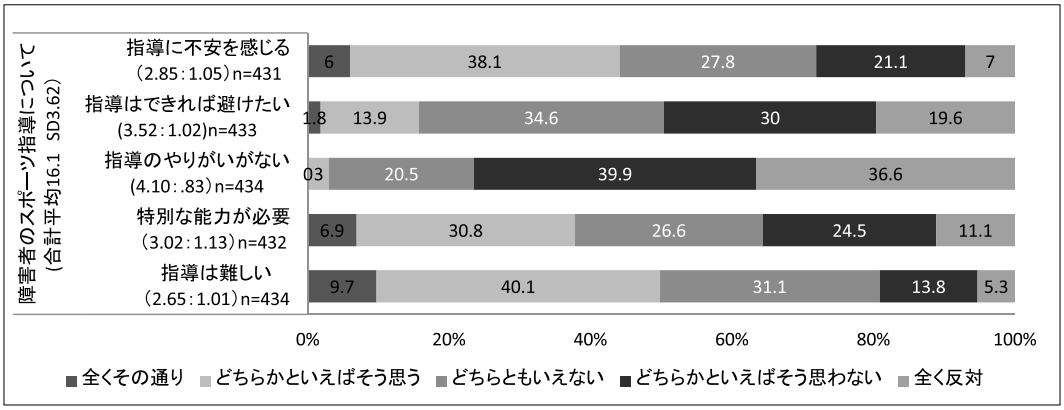

図4　障害者のスポーツ指導に関する意識

表3　男女別にみた障害者や障害者スポーツに対する意識の違い

		男	女	t 値	有意差
身体障害者に対する意識	n	297	128	1.223	-
	平均	15.4	15.78		
	SD	2.995	2.723		
知的障害者に対する意識	n	296	128	0.594	-
	平均	19.55	19.75		
	SD	3.292	3.058		
障害者スポーツに対する意識	n	296	126	1.308	-
	平均	19.16	19.59		
	SD	3.188	2.717		
障害者のスポーツ指導に対する意識	n	297	129	1.166	-
	平均	16.02	16.47		
	SD	3.712	3.394		

表4　年齢別にみた障害者や障害者スポーツに対する意識の違い

		21-39 歳	40-49 歳	50-59 歳	60 歳 -	F 値	有意差
身体障害者に対する意識	n	89	95	106	137	3.325	**
	平均	15.79	15.99	15.69	14.9		
	SD	2.741	2.991	2.843	2.949		
知的障害者に対する意識	n	88	95	106	137	13.224	**
	平均	20.69	20.4	19.56	18.35		
	SD	2.575	3.227	3.071	3.318		
障害者スポーツに対する意識	n	87	93	104	140	4.13	**
	平均	19.44	19.8	19.65	18.56		
	SD	2.96	3.006	2.968	3.108		
障害者のスポーツ指導に対する意識	n	89	95	107	137	0.751	-
	平均	15.67	16.4	16.33	16.13		
	SD	3.544	4.213	3.534	3.269		

ことが明らかになった.

表 5 は指導経験年数別にみた障害者や障害者スポーツに対する意識の違いをみたものである．いずれも統計的な有意差はみられなかった.

表 6 は障害者のスポーツ指導経験の有無別にみた障害者や障害者スポーツに対する意識の違いについてみたものである．障害者スポーツに対する意識および障害者のスポーツ指導に対する意識において差がみられた．いずれも障害者のスポーツ指導の経験のある指導者の得点が高かった.

5.4 障害者のスポーツ指導に関して不安に感じる点や知識を身につけたい内容，および障害者受入れの条件

表 7 は障害者にスポーツ指導をしなくてはならなくなったときに不安を感じる点をリスクマネジメントに関わる領域（①たおれたり怪我したりなど緊急時の対処方法，②障害者にとっての安全な環境づくり．③突然大声を出したり，パニックを起こしたり等問題行動に対する対処，④運動量に対する配慮，⑤保険や補償の問題）．コミュニケーション等障害者に対する対応に関する領域（⑥コミュニケーション方法等障害者に対する接し方，⑦障害部位に対するケア，⑧教室等に参加している他の障害のないメンバーの理解，⑨介助方法，⑩車いすや義足の扱い方）．スポーツ指導に関わる領域（⑪スポーツの技術面の指導方法，⑫障害者のための競技ルール，⑬障害者スポーツに独特のクラス分けについて，⑭戦術や作戦，⑮大会出場のための手続きなど）．⑯その他の 3 つの領域の 16 個の選択肢の中から 3 つを選択してもらった結果を示している.

領域別ではリスクマネジメントに関わる領域の回答が最も多く全体回答数の半数以上（52.4%）を占めた．続いてコミュニケーション等障害者に対する対応に関する領域（同 30.9%）, スポーツ指導に関わる領域（同 15.9%）となった.

16 の選択肢別では，①たおれたり怪我したりなど緊急時の対処方法（回答者数の 43.8%），②障害者にとっての安全な環境づくり（同 41.7%）, ⑥コミュニケーション方法等障害者に対する接し方（同 40.8%），③突然

表5　指導経験年数別にみた障害者や障害者スポーツに対する意識の違い

		0-10 年	11-20 年	21 年 -	F 値	有意差
身体障害者に対する意識	n	162	108	157	0.15	-
	平均	15.6	15.54	15.43		
	SD	2.864	2.756	3.081		
知的障害者に対する意識	n	161	108	157	2.653	-
	平均	19.97	19.68	19.15		
	SD	3.085	3.117	3.402		
障害者スポーツに対する意識	n	160	106	158	0.981	-
	平均	19.03	19.53	19.37		
	SD	2.965	2.983	3.189		
障害者のスポーツ指導に対する意識	n	164	108	156	1.562	-
	平均	15.77	16.25	16.47		
	SD	3.641	3.774	3.459		

表6　障害者のスポーツ指導経験の有無別にみた障害者や障害者スポーツに対する意識の違い

		経験あり	経験なし	t 値	有意差
身体障害者に対する意識	n	107	320	0.464	-
	平均	15.64	15.48		
	SD	2.963	2.901		
知的障害者に対する意識	n	106	320	0.114	-
	平均	19.62	19.58		
	SD	3.443	3.156		
障害者スポーツに対する意識	n	103	321	2.163	*
	平均	19.84	19.1		
	SD	3.045	3.041		
障害者のスポーツ指導に対する意識	n	107	321	4.998	**
	平均	17.62	15.65		
	SD	3.855	3.399		

表7　障害者にスポーツ指導をしなくてはならなくなったときに不安を感じる点

回答者数 429・選択数 3・全回答数 1287		n（回答数）	全回答数内％	回答者数内の％
リスクマネジメント	たおれたり怪我したりなど緊急時の対処方法	188	14.6%	43.8%
	障害者にとっての安全な環境づくり	179	13.9%	41.7%
	突然大声を出したり，パニックを起こしたり等問題行動に対する対処	167	13.0%	38.9%
	運動量に対する配慮	94	7.3%	21.9%
	保険や補償の問題	46	3.6%	10.7%
	小計	674	52.4%	157.1%
障害者対応	障害者に対する接し方（コミュニケーション方法等）	175	13.6%	40.8%
	障害部位に対するケア	77	6.0%	17.9%
	教室等に参加している他の障害のないメンバーの理解	68	5.3%	15.9%
	介助方法	55	4.3%	12.8%
	車いすや義足の扱い方	23	1.8%	5.4%
	小計	398	30.9%	92.8%
スポーツ指導	スポーツの技術面の指導方法	92	7.1%	21.4%
	障害者のための競技ルール	52	4.0%	12.1%
	障害者スポーツに独特のクラス分けについて	37	2.9%	8.6%
	戦術や作戦	18	1.4%	4.2%
	大会出場のための手続きなど	6	.5%	1.4%
	小計	205	15.9%	47.8%
	その他	10	.8%	2.3%
合　　計		1287	100.0%	300.0%

大声を出したり，パニックを起こしたり等問題行動に対する対処（同 38.9%）と回答した人が多かった．

表 8 は障害者のスポーツ指導のために受けたいと思う講習内容を以下の 4 領域 20 の選択肢の中から 3 つ選択してもらった結果である．リスクマネジメントに関わる領域（①緊急時の対処方法，②大声を出す等問題行動に対する対処方法，③安全な環境づくり，④ヒヤリ・ハットの事例と改善方法）．スポーツ指導に関わる領域（⑤技術指導など障害者のスポーツ指導方法，⑥障害者のための競技ルール，⑦クラス分けについて，⑧障害者のスポーツ大会について）．障害者対応に関わる領域（⑨障害者に対する接し方，⑩障害について，⑪介助方法，⑫車いすや義足などの扱い方）．体験交流に関わる領域（⑬障害者のスポーツ指導の見学，⑭障害者スポーツの体験，⑮障害のある当事者との交流）．政策・理念に関わる領域（⑯障害者スポーツの理念考え方，⑰障害者スポーツの組織，⑱障害者スポーツの歴史，⑲障害者福祉施策）．⑳その他．

領域別では[注4)] 回答数が多かった領域から，リスクマネジメントに関わる領域（全回答数の 34.7%），スポーツ指導に関わる領域（同 22.0%），障害者対応に関わる領域（同 17.9%），体験・交流に関わる領域（同 16.7%），政策･理念に関わる領域（8.6%）の順であった．

20 の選択肢別では，⑤技術指導など障害者のスポーツ指導方法（回答者の 48.4%），①緊急時の対処方法（同 39.5%），⑨障害者に対する接し方（同 29.9%），②大声を出す等問題行動に対する対処方法（同 26.6%），⑬障害者のスポーツ指導の見学（同 24.8%），③安全な環境づくり（同 21.5%），⑯障害者スポーツの理念考え方（同 21.3%）が回答者数の 20%を超える回答率であった．

表 9 はどのような条件がクリアできれば，指導している現場で障害者を受け入れることができるかを聞いた結果である．①障害についての知識の獲得，②応援スタッフの配置，③障害者のスポーツ指導経験，④他の参加者の理解，⑤クラブや教室主催者の理解，⑥障害者の家族の同伴，⑦建物のバリアフリー化，⑧その他の 8 個の選択肢の中から二つを選んでもらった結果である．①障害についての知識の獲得（回答者の 39.9%），②応援スタッフの配置（同 38.1%），③障害者のスポーツ指導経験（同 32.7%），④他の参加者の理解（同 31.2%）が 30%を超える回答率であった．

注4) 体験･交流に関わる領域の項目数は一つ少なくなっている．

表8　受講したい講習内容

回答者数 428・選択数 3・全回答数 1284		n（回答数）	全回答数内％	回答者数内の％
リスクマネジメント	緊急時の対処方法	169	13.2	39.5
	大声を出す等問題行動に対する対処方法	114	8.9	26.6
	安全な環境づくり	92	7.2	21.5
	ヒヤリ・ハットの事例と改善方法	70	5.5	16.4
	小計	445	34.7	104.0
スポーツ指導	障害者のスポーツ指導方法（技術指導など）	207	16.1	48.4
	障害者のための競技ルール	54	4.2	12.6
	クラス分けについて	11	.9	2.6
	障害者のスポーツ大会について	10	.8	2.3
	小計	282	22.0	65.9
障害者対応	障害者に対する接し方	128	10.0	29.9
	障害について	42	3.3	9.8
	介助方法	40	3.1	9.3
	車いすや義足などの扱い方	20	1.6	4.7
	小計	230	17.9	53.7
体験・交流	障害者のスポーツ指導の見学	106	8.3	24.8
	障害者スポーツの体験	56	4.4	13.1
	障害のある当事者との交流	52	4.0	12.1
	小計	214	16.7	50.0
政策・理念	障害者スポーツの理念考え方	91	7.1	21.3
	障害者スポーツの組織	8	.6	1.9
	障害者スポーツの歴史	7	.5	1.6
	障害者福祉施策	5	.4	1.2
	小計	111	8.6	25.9
その他	その他	2	.2	.5
合　　計		1284	100.0	300.0

表9　障害者受入れの条件

回答者数 391・選択数 2・全回答数 782	n（回答数）	全回答数内％	回答者数内の％
障害についての知識の獲得	156	19.9	39.9
応援スタッフの配置	149	19.1	38.1
障害者のスポーツ指導経験	128	16.4	32.7
他の参加者の理解	122	15.6	31.2
クラブや教室主催者の理解	114	14.6	29.2
障害者の家族の同伴	67	8.6	17.1
建物のバリアフリー化	37	4.7	9.5
その他	9	1.2	2.3
合計	782	100.0	200.0

6. 考察

6.1　身体障害者，知的障害者，障害者スポーツ，障害者のスポーツ指導に対する意識について

身体障害者に対する意識に関しては，身体障害者がスポーツを実施すること，その実施能力は健常者と比べてそれほど劣るものではないと考えているようである．長野パラリンピック以降メディアを通して障害者スポーツを目にすることが増えたこと，また実際に障害者のスポーツ指導経験がある指導者が24.9％いることなどからこのように認識しているものと推測される．しかしながら，身体障害者に特殊な能力がある人が多いと考える指導者が多いことは障害のある人を特殊な人々と考えていることの表れであり，障害のない人とは違う人という認識も同時に持っていること表れだと考えられる．特殊な能力を持っているように思える障害者も決してそうした能力がはじめから備わっていたわけではなく，スポーツや日常生活等において障

害部位を補っていく中で身につけた能力であることを理解できるようにすることが必要である．いたずらに障害者の特殊な能力を強調することは障害者を特別な障害のない人とは違う人たちと認識させることとなる．

知的障害者に対する意識，理解は比較的高かった．障害があっても発育・発達の可能性は持っており，スポーツのルールを理解してスポーツを楽しむことが可能だと考えている人が多いという結果であった．この結果は筆者が体育・スポーツ系の学生に対して実施した同じ内容の調査結果（藤田 2004）と同じ傾向を示した（図 5 参照）．

障害者スポーツに対する意識，理解も比較的高かった．特に障害者スポーツを行う際にもそれなりの運動技術が必要だと考えている指導者は 86.6％でほとんどの指導者がそのように認識していた．障害者スポーツはみていても面白くないとする指導者は 3.5％にとどまり，反対に面白いとする指導者は 73.1％であった．これに対して障害者スポーツは特別なスポーツだと考えている指導者は 56.9％，障害者のみが参加するものだとする指導者は 59.3 と過半数となっている．障害者スポーツは子どものスポーツが一般のスポーツルールを子ども用に修正したものであるのと同じように，障害者用に修正したスポーツに過ぎない．しかし，障害者のみが参加する特別なスポーツと認識している指導者が多い．地域で障害のある人とない人が一緒に運動を楽しんだり，スポーツで競い合ったりすることは十分可能であるし，スポーツ基本法の目指すところでもある．これを実現するためにも障害者スポーツは特別なスポーツではなく，ちょっとした工夫で障害者も参加でき，一緒に楽しむことができるスポーツだという認識が必要であろう．

障害者のスポーツ指導に関してはやりがいがあると感じている人が大半で（76.5％），やりがいがないと感じている人は 3％に過ぎない．しかし，一方で不安を感じていたり（44.1％），難しいと感じている人（49.8％）も多く，特別な能力が必要だと感じている指導者も比較的多い（36.7％）．こうした指導者のニーズに応じた講習会を受けたり，経験を積むことでこうした不安は解消されるものと思われる．

図 5 は筆者が体育・スポーツ系の学生に対して実施した同じ調査内容の各領域（身体障害者に対する意識，知的障害者に対する意識，障害者スポーツに対する意識，障害者のスポーツ指導に対する意識）の 4 項目の合計点を今回の結果と比較したものである．学生には障害者スポーツ関連の授業の受講前と後で同じ内容の調査を実施した．

（公財）日本体育協会公認の指導者の得点は，いずれも障害者スポーツ関連授業を受講する前の学生よりは高く，授業後よりは低かった．体協指導者の場合，一定のスポーツ指導経験があることや障害者のスポーツ指導経験のある人がいたこと，しかしながら多くの指導者が障害者スポーツに関する専門的な知識を得るための機会が少ないことが影響していると考えられる．

6.2　障害者のスポーツ指導に関して不安に感じる点や知識を身につけたい内容，および障害者受入れの条件について

指導者が不安に感じていることは領域別ではリスク

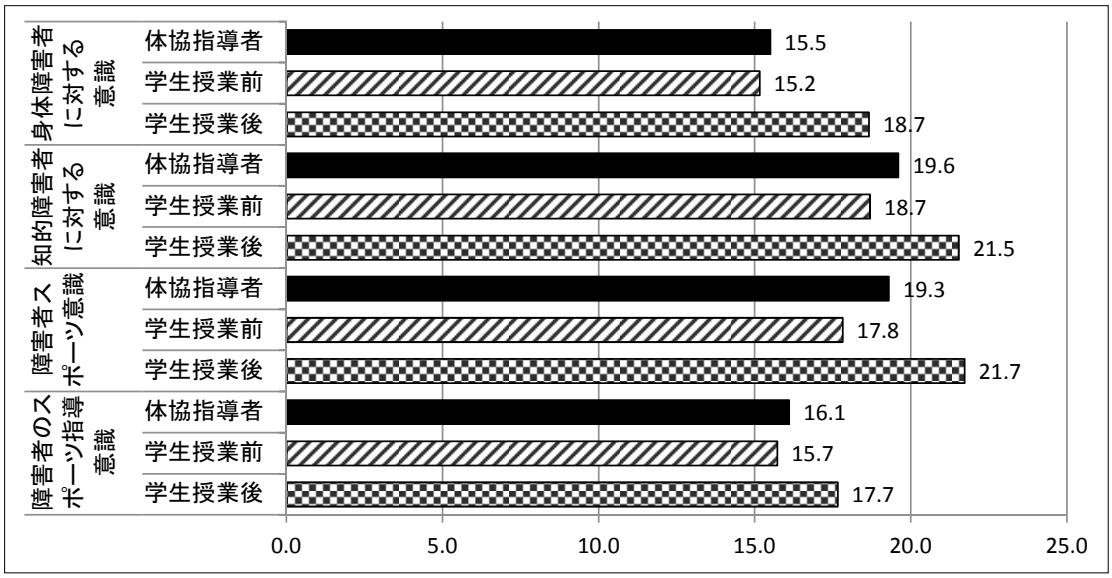

図5　障害者や障害者スポーツに対する意識の体協指導者と学生の比較

マネジメントに関わる領域，続いてコミュニケーション等障害者に対する対応に関する領域が多かった．具体的な内容では緊急時の対処方法，障害者にとっての安全な環境づくり，コミュニケーション方法等障害者に対する接し方，突然大声を出したり，パニックを起こしたり等問題行動に対する対処が多かった．

これらはいずれも障害者を対象とすることで直面する課題であり，指導者のこれまでの学習や経験にはなかったものだと推測される．受講したい講習内容に関しても，緊急時の対処方法，障害者に対する接し方，大声を出す等問題行動に対する対処方法，安全な環境づくりなどリスクマネジメントや障害者対応に関する内容をあげた人が多かった．障害者のスポーツ指導が期待される地域のスポーツ指導者にはこうした内容の講習が必要である．加えて，各指導者が専門とするスポーツ競技を障害者が実践するときの留意点，技術指導方法などにも高い関心があることが明らかになった．リスクマネジメント，コミュニケーション方法等障害者との対応方法，そして障害者を対象とした専門的な技術指導方法が重要なテーマである．アンケート回答者のスポーツ指導の現場での障害者の受け入れ条件として障害についての知識の獲得をあげた人が一番多かったことからも，地域スポーツ指導者に対するこうしたテーマの講習が望まれる．

7. まとめ

本研究では日本体育協会公認のスポーツ指導者が障害者や障害者スポーツに対してどのような意識を持っているのか，また，どのような点に不安を持ち，どのような知識や技術を身につけたいと考えているのかを明らかにすることを目的とし，指導者 1000 人に対してアンケート調査を実施した．回答者は 434 人，回収率は 43.4％であった．調査の結果から明らかになった点は以下のとおりである．

①回答者の 24.9％は障害者のスポーツ指導の経験を有していた．
②身体障害者がスポーツを実施する能力に理解をする人が多い一方で，障害者は特別な能力を有する人など障害者は健常者と違う人だと理解する人も多かった．
③障害者スポーツの面白さや運動技術の必要性を理解する人が多い一方で，障害者スポーツは障害者のみが参加する特別なスポーツと考える指導者も多くみられた．
④障害者のスポーツ指導はやりがいがあると感じているものの，不安や困難さを感じる指導者が多かった．
⑤身体障害者や知的障害者，障害者スポーツ，障害者のスポーツ指導に対する理解は年代別では 60 代の指導者に他の年代と比べて理解度が低い人が多くみられた．
⑥障害者のスポーツ指導経験のある指導者に身体障害者や知的障害者，障害者スポーツ，障害者のスポーツ指導に対する理解度が高い人が多くみられた．
⑦障害者のスポーツ指導に際してはリスクマネジメントや障害者との対応方法に不安を感じている指導者が多かった．
⑧障害者のスポーツ指導のために，障害者に対するスポーツ指導方法，緊急時対応，障害者との対応方法を学びたいとする指導者が多かった．

これらの結果を踏まえたうえで，体協のスポーツ指導者をはじめ地域のスポーツ指導者のニーズに応じた講習会等が開催されることが望まれる．

文　献

Block, M.E., Zeman, R: Including students with disabilities in regular physical education: Effects on nondisabled children, Adapted Physical Activity Quarterly, 13, 38-49, 1996.

Block, M.E.: Impact of inclusion in general physical education on students without disabilities, Adapted Physical Activity Quarterly, 20, 230-245, 2003,

藤田紀昭・石川敬一・運天健・大胡田茂夫・門脇肇・小林敏枝・柴田寛・増田和茂・矢吹知之・山下慎：障害者スポーツ指導者の活動の活性化に向けて，日本障害者体育・スポーツ研究会研究紀要 27，28-35，2003.

藤田紀昭：障害者の参加形態別にみた総合型地域スポーツクラブの特徴に関する研究，障害者スポーツ科学，10（1），21-34，2012.

藤田紀昭：障害者スポーツの授業が大学生の態度に与える影響に関する研究，日本福祉大学社会福祉論集 108，45-54，2004.

藤田紀昭・寺田恭子・山崎昌廣・金山千広：東海地区小学校における障害のある児童の体育授業に関する研究，日本福祉大学福祉論集 120，61-74，2009.

福岡県障害者スポーツ協会･徳島大学スポーツ経営学研究室：障害者スポーツ指導員の活動及び意識に関する調査報告書，http://www1a.biglobe.ne.jp/fhspokyo/fhs_data.pdf,2011.

林敏弘：財団法人日本体育協会―スポーツ指導者養成の現状と課題―，保健の科学 44（11），846-852，2002.

金山千広・下村雅昭・山崎昌廣：小中学校における障害のある児童の体育授業に関する研究―近畿地区の実態調査から―，聖和大学論集 35A，51-61，2007a.

金山千広・下村雅昭・山崎昌廣：小中学校における障害のある児童の体育授業に関する研究―全国の実態調査から―，聖和大学論集 36A，49-59，2007b.

金田安正・若月博延・山崎昌廣：北信越地区小中学校のアダ

プテッド・スポーツ実施状況について，びわこ成蹊大学スポーツ大学研究紀要 6，183-189，2009.
熊安貴美江・中田順造・山本章雄・吉武信二：スポーツ指導者の活動実態と意識に関する調査研究―大阪府内の有資格スポーツ指導者の男女差に着目して―，大阪女子大学紀要 33 体育学編，45-65，1996.
村井里依子・松崎緑・岩崎みすず・小林美子：学生が実習前後に抱く精神障害者のイメージ―精神看護実習前後の比較を通して―，長野県看護大学紀要 4，41-49，2002.
松村孝雄・横川剛毅：知的障害者のイメージとその規定要因，東海大学文学部紀要 77，112-104，2002.
文部科学省：平成 23 年度　総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果　概要，2012.
文部科学省：スポーツ基本計画，59，2012.
永浜明子・藤村弘子：アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告（第Ⅰ報）―アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業評価の観点から―，大阪教育大学紀要　第Ⅴ部門 60（1），39-49，2011.
永浜明子：アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告（第Ⅱ報）―アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業評価の観点から―，大阪教育大学紀要　第Ⅴ部門 60（2），31-44，2012.
岡達生：地域スポーツ振興を支える指導者の養成・確保～（財）日本体育協会の取り組み～，体育の科学 53（9），681-686，2003.
岡達生：財団法人日本体育協会のスポーツ指導者制度改革について，トレーニングジャーナル 2005 年 9 月号，63-66，2005.
岡達生：日本体育協会における指導者育成，体育の科学 56（4），263-270，2006.
小野美和：福祉系の学生と一般大学生の障害者に対するイメージとその意味づけについての比較と検討，日本教育心理学会総会発表論文集 51，77，2009.
齊藤まゆみ：A 県小学校における障害のある児童の体育実施状況，スポーツ教育学研究 27（2），73-81，2008.
高野千春：障害者スポーツに対する学生の意識の変化―「初級障害者スポーツ指導員」認定カリキュラムを通して―，平成国際大学スポーツ科学研究所所報 6，9-14，2011.
徳珍温子・藤田大輔：女子学生・生徒の「身体的」障害者イメージについての一考察，大阪信愛女学院短期大学紀要 39，9-20，2005.
豊村和真・高沢昌代：障害者のイメージに関する基礎的研究，日本教育心理学会総会発表論文集 50，637，2008.
Tripp,A., French,R. & Sherill, C.: Contact theory and attitudes of children in physical education programs towards peers with disabilities, Adapted Physical Activity Quarterly12, 323-332, 1995.
内田若希・永野典詞：障害者スポーツ指導者に必要な資質に関する調査研究，障害者スポーツ科学 7（1），61-68，2009.
保井俊英・永田隆子・三上真二・藤原進一郎：「障害者スポーツ指導者制度中級スポーツ指導員」資格取得者の意識と指導実績について，武庫川女子大学紀要（人文･社会科学）55，107-113，2007.
保井俊英・永田隆子・三上真二：「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて―障害者スポーツ中級スポーツ指導員資格取得に結びつけるためには―，武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）56，127-131，2008.
保井俊英・永田隆子・三上真二：（人文・社会科学）「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて（2）―2 年分の調査から―，武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）57,」75-81，2009.
安井友康・時政幸司：障害者とのスポーツ交流実践の効果―車いすバスケットボールへの参加が学生の意識に与える影響―，北海道教育大学紀要（教育科学編）49（1），207-214，1998.
安井友康：車椅子バスケットボールの交流体験が障害者のイメージに与える影響，障害者スポーツ科学 2（1），25-30，2004.
安井友康：小中学校における障害のある児童生徒の体育授業に関する研究―北海道における調査から―，北海道教育大学紀要・教育科学編 58（1），165-179，2007.
安井友康・山崎昌廣：小中学校における障害のある児童生徒の体育授業―インクルーシブな授業に向けた工夫に関する記述の分析から―，北海道教育大学紀要・教育科学編 58（2），117-132，2008.
吉武信二・中田順造・山本章雄・熊安貴美江：スポーツ指導者におけるスポーツ観および指導観に関する研究―大阪府におけるスポーツ指導者（有資格者）の経験競技種目に着目して―，大阪女子大学紀要 32 体育学編，35-75，1995.